

ザ・クインテッセンス／2012. 11月号

○特集「日常臨床で遭遇する歯周炎への対応—あなたならどうする？」

(座長：吉江弘正・佐藤聡 演者：川瀬知之・船越栄次・伊藤公一・申基詰・宮本泰和)

*第55回春季日本歯周病学会学術大会の臨床シンポジウムで行われた「治療計画を会場一体となって考える試みで、実際に聴衆に投票してもらった結果を瞬時に集計し、ディスカッションに反映させていく」という企画。第1部では佐藤聡先生から症例提示があり、「治療法と再生療法時の生体材料は何を用いる？」というものでアンケート結果を示している。生体材料の基礎知識を学んだ後、各講師が自家骨・人工骨・GTR膜・エナメル基質タンパク質をそれぞれ用いた症例を示し考察を加えている。その後同様のQ&Aを行い、症例の結果を提示している。

第2部では「生体材料を併用する場合、何を用いるか？」について、その基礎知識を示された後、アンケートを行い、各講師がそれぞれの症例を例示している。1部と同様この後Q&Aを行い、歯周再生治療を成功するための条件等をまとめている。

歯周治療に再生療法を行う場合、どうすれば最良の結果を得ることができるか術式や生体材料の選択に迷うことがある。今回のアンケート結果やエキスパートの参考症例や解説はその回答につながるのではないだろうか？

日本歯科評論／2012. 11月号

○特集「拔牙する前に考える意図的再植(塚原宏泰 斎田寛之 他)」

*インプラント治療が進歩するにつれ、歯牙を残すより早いうちに拔牙するケースが時に見られることがあります。しかし一方何とか天然の歯牙を残そうとして日々努力をしている先生もおられます。本特集は後者の先生方が意図的再植を適用し、いかに拔牙を回避するかを症例を通して解説しています。「歯を保存したい」患者さんの気持ちにこたえるためにも是非一読ください。

○訪問歯科診療時の義歯作製における「にらめっこ機能印象」

—135例の総義歯症例を通して得られたもの(湯田 亜希子)

*訪問診療で義歯を作成するのは簡単なことではありません。まして下顎総義歯を吸着させるのは至難の業です。筆者は阿部二郎氏の吸着義歯理論を訪問診療での義歯製作に取り入れ、多くの義歯を作成して成功しています。訪問診療をされている方は是非参考にしてください。

デンタルダイヤモンド／2012. 11月号

○実践歯学ライブラリー／下顎総義歯吸着を歩む—私の臨床日記(佐藤勝史)

*総義歯臨床は経験に頼る部分が多く、特に下顎義歯の吸着に関してはテクニックセンシティブがいわれて久しい。本特集は、下顎義歯の吸着のコンセプト、メカニズム、印象法を詳しく解説している。また、その印象法によっても吸着が得られない場合の対処法および辺縁封鎖のめれ部の探索法や対処法についても述べている。

○顎関節と咬合に強くなろう—毎日の臨床が楽しくなる⑩

顎関節症1：病態ごとの効果的なマニピュレーションとは
—関節円板の前方転位と後方転位にはこう対応する(小出 肇ほか)

*急性非復位性顎関節円板前方転位および後方転位に対してマニピュレーションを行う際、従来のマニピュレーションテクニック(ファラー法)では、問題点も多く、成功率も低く、リダクション(円板の復位)が得られても予知性は必ずしも高くない。そこで本稿では顎関節円板転位の診断と、従来の方法に改良を加えた有効なテクニック、適切な前処置と後処置の具体的な手技を示している。

歯界展望／2012. 11月号

○特集 骨移植材の臨床 骨移植材は必要か？

—基礎の立場から—(宮崎 隆 片岡 有 滝口 裕一)

*歯科臨床の現場では、さまざまな骨移植材が使用されている。それらの多くは海外で開発され、良好な結果が数多く報告されているにもかかわらず、わが国では承認をうけていないものもある。本稿では臨床上的必要性の高い骨移植材を、どのように安全に使用すべきか、生体材料学的立場から考察している。実験材料として、異種他家骨「バイオオス」、ハイドロキシアパタイト系移植材「ネオボーン」、 β -TCP系骨移植材「オスフェリオン」を使用している。

○シリーズ／卒後15年・開業5年、目指すべき臨床の姿

(井上 優・中野 稔也・荒木 秀文・木村 英生)

*卒後15年、開業5年と言う節目は、多くの臨床医にとって、試行錯誤の時を経て、臨床のスタンスが確立する時期といえる。本シリーズでは、若手歯科医師の接着修復の症例を提示しているので、参考にしたい。